

横山源之助と北陸地方

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 橋本, 哲哉, Hashimoto, Tetsuya メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000368

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



横山源之助と北陸地方

橋 本 哲 哉

(一)

横山源之助は魚津の出身である。名著『日本の下層社会』の著者として、横山を知る人は多い。が、彼のこうした北陸との結びつきについて知る人は、そう多くはないであろう。天涯茫茫と号したように、また生来の放浪癖の性格もあってか、横山は故郷についてあまり語ってはいない。というより、横山源之助の人となりについては、今なお明らかでない、といった方が正確であろう。

しかし彼の仕事をこまかくみてみると、北陸地方に関する観察、分析はすくなくない。その一部分はのちにみるように、『日本の下層社会』の中にも載せられている。本稿では、横山の北陸地方に関する叙述の重要と思われる部分を整理し、横山についての評価のひとつの試論を提出してみたいと考える。

最近、日本近代史研究の中で、横山源之助の仕事に対して、一定の再評価がなされつつある。これまで、その仕事の大きさ、重要性の割には評価がつつましかった様に思う。そのひとつとしては、『日本の下層社会』の解説となされたものがある。中央労働学園版の土屋香雄のもの、岩波文庫版の風早八十二のものなどがそれ

横山源之助と北陸地方

横山源之助と北陸地方

にあたる。これらは『日本の下層社会』の解説のために、その内容の紹介、意義づけ、横山の仕事全体の中での位置づけなどに主眼がおかれている。それらの過程から、横山の評価を試みていたいってさしつかえない。いわば、横山の本格的な分析を意図した研究とは少しことなつた性格のものといえよう。もうひとつは西田長寿「横山源之助著『日本の下層社会』の成立」(『歴史学研究』一六一号、一九五三年)、小田切秀雄「下積みの人間への尽きない愛」(『世界』一九四九年一〇月号)などの論文がある。前者は横山の経歴・活動をこまかく分析したうえで、『日本の下層社会』の成立の契機をとりあげ、さらにその後の仕事との関連についてふれている。また、ほぼ完璧な著作・論文目録が便利である。後者は主として横山の視点やその活動の内面についての掘り下げをおこなっている。その意味では文学の面からの評価といつてよからう。西田論文はその内容がすぐれていることもあるが、いわば、横山の評価の「古典」となり、その後、再評価の機会がほとんどみられなかったといえよう。西田論文の方法を発展させるものがなかったわけである。

しかし、最近これらとは別な角度から横山の仕事をとりあげる研究が多くなつた。とくに日本資本主義確立期前後の都市の問題等の研究のなかにそれがはっきりとかがえる。『日本の下層社会』

に即していえば、第一編の東京の貧民状態などを中心とした記述が史料としての意味をも含めて、都市形成の分析に大いに役立てられている。また第四編の機械工場の労働者などを中心とした記述が、

資本制生産のもとの労働者の状態を具体的に知るうえで、たくさん材料を提供している。これらは資本主義社会における都市のあり方、また都市における民衆運動の歴史的前提の究明というきわめて現在の課題ともするどく結びついているといえよう。したがって、先へのべた視角から研究するものは、一度は『日本の下層社会』をとりあげ、さらには横山の他の著作・論文に目をおさるるをえなくなっている。筆者も「日本帝国主義確立過程の労働問題」

（『世界史認識と人民闘争史研究の課題——歴史学研究別冊』一九七一年一〇月所収）で、一部分横山の論文をとりあげた。これらの研究は、横山の仕事を部分的に引用するといふかたちをとり、その仕事全体の評価とはややことなつたものといえよう。しかしながら、これらの諸研究は日本資本主義確立期の社会状況・矛盾をみたら、これらの諸研究は日本資本主義確立期の社会状況・矛盾をみたら、横山の観察力の鋭さを怪視したり、否定したりするものでは決してない。こうした研究の流れから部分的ではあれ、横山の再評価がはじまっているといつてよからう。その意味では昨年末から刊行が開

始された『横山源之助全集』（明治文献出版、全五巻予定）はまことに時宜になつたものである。これまで利用しにくかつた各種新聞・雑誌での横山の記事や論文をほぼ網羅する企画で、とくに地方の研究者にとつて、その出版の意義ははかりしれないものがある。

この第一巻のみが現在刊行中であるが、隅谷三喜男氏の解説が巻末に掲載されている。我々は横山の全著作・論文を容易に手にするこ

とができるようになったわけである。この機会により緻密な横山の分析がなされ、それをつうじて、日本資本主義確立期のより具体的な研究が可能となるであろう。土屋、風早の解説を横山研究の第一期、西田・小田切の研究を第二期とするならば、その第三期をむかえつつあるわけである。

(二)

まず、横山源之助の生涯とその活動を、西田論文をもとに簡単にみておくことにしよう。

横山は一八九一（明治四）年、魚津に生まれている。ある網元とその家の若い女中との間に生まれたが、そうした事情から、小さい頃近在の相当の左官職の家にもらわれて成長した。子供の時から才智に秀れていたが、一二・三才の頃、一時油問屋に奉公に出たりした後、富山の中学校に進んだ。一八八六（明治一九）年二月頃、その学友と一緒に、青年らしい夢をもって東京にとびだした。東京法学院（中央大学の前身）などで勉強するかたわら、川島浪速や『國民之友』の平和主義、二葉亭四迷などの影響をうけた。さらに一八九〇年前後には社会問題に興味をもち、先輩の松原岩五郎（当時「最暗黒の東京」などの貧民窟の探訪記を発表していた）と交流をもち、実情調査の道に入った。そうした中で、一八九四（明治二七）年一月頃、片淵啄の推せんで、島田三郎の毎日新聞に入社した。それから一八九八（明治三一）年までの間、天涯茫茫、有磯逸郎などの筆名で、下層社会のルポルタージュを次々と発表するところ

となった。

横山の毎日新聞での仕事は、第一に東京を中心とした都市の社会探訪にあった。その間、文学にも関心をもち、露伴や道遥などを訪れたりしており、仕事の中に文学的な臭いを強くもたせている。第二の仕事は一八九六（明治二九）年三月から四月にかけて、桐生・足利方面の絹織物業界に關しての視察報告である。第三は、その後同年八月頃健康を害して魚津に帰ったが、九月から翌年七月に大阪にいくまでの約一〇ヶ月間、富山・石川・福井の北陸三県の地方都市下層社会、農村、機業などの報告を相ついで発表している（後述）。第四は一八九七（明治三〇）年七月から一〇月にかけて、大阪を中心とした阪神地方の労働事情を調査している。その年の一〇月東京に帰り、以後退社までの間、それまでの記事を中心とした『日本の下層社会』の編集・出版におわれている。

どのような事情から毎日新聞を退社したか不明であるが、その後は横山にとって失意の時代であったようである。郷里に帰り、『内地雑居後の日本』を執筆し、高野房太郎・片山潜らの社会運動家と交流をもった。一九〇〇（明治三三）年頃から高野・桑田熊蔵らの援助によって農商務省の職工事情の調査に加わり、『職工事情』の報告の一部を担当した。さらに各種の雑誌（新公論、中央公論、太陽など）に寄稿することによってしばらく生活を支えた。

一九二二（明治四五）年三月からは、ブラジル移民の視察にくわり、その通信を大阪朝日新聞に送っている。

晩年の横山は悲惨な生活をおくっている。家族関係も不幸であり、彼の性質である放浪癖も禍いしたようである。そして、一九一

横山源之助と北陸地方

九（大正四）年六月三日、東京小石川で、さびしくその生涯をとじた。

横山の略歴は以上であるが、こうしてみると、毎日新聞時代が彼にとってもっとも油ののりきった時代といつてよからう。その時期の活動の結晶として『日本の下層社会』があるわけで、きわだった光をはなっているのも、もっとものことである。この毎日新聞時代の後半に一度北陸を訪れている（後、一八九九—一九〇〇年に郷里に帰っている）が、その時期に、この地で視察し、報告した仕事の評価をより緻密にしてみることに意義は深いといえよう。

次に毎日新聞時代の北陸関係の論文目録を紹介しておく。

横山源之助北陸関係論文目録

（一八九六年九月—九七年七月）

- ① 田舎の風尚 毎日新聞（以下、毎日と略）、七七二九号（一八九六〔明治二九〕年九月二二日）。
- ② 地方の青年 (1) 毎日 七七三四号（九月一八日）、横山源之助全集第一卷（以下、全集と略）四五八頁。
- ③ 同 (2) 毎日 七七三七号（九月二二日）、全集 四六一頁。
- ④ 地方の下層社会 (1) 毎日 七七六四号（一〇月二五日）、全集 四六三頁。
- ⑤ 同 (2) 毎日 七七六五号（一〇月二七日）、全集 四六六頁。
- ⑥ 同 (3) 毎日 七七六六号（一〇月二八日）、全集 四六九頁。

横山源之助と北陸地方

- ⑦ 同 (4) 毎日 七七六七号 (一〇月二九日)、全集 四七〇頁。
- ⑧ 同 (5) 毎日 七七六八号 (一〇月三〇日)、全集 四七四頁。
- ⑨ 同 (6) 毎日 七七七〇号 (十一月一日)、全集 四七六頁。
- ⑩ 同 (7) 毎日 七七七二号 (十一月二日) ~ 七七九五号 (十一月三日)、日本の下層社会 (以下、下層社会と略) 第五編第一 ~ 第八所収、全集 二五〇 ~ 二七八頁。
- ⑪ 同 (8) 毎日 七七九六号 (二月四日)、全集 四七九頁。
- ⑫ 農業国の工業 毎日 七七八二号 (二月一七日)。
- ⑬ 地方の下女払底 毎日 七八〇三号 (二月二日)、下層社会 第五編第九所収、全集 二七八頁。
- ⑭ 田舎のとしくれ 毎日 七八一六号 (二月二七日)。
- ⑮ 田舎の正月 (1) 毎日 七八二六号 (一八九七〔明治三〇〕年一月一二日) 全集 四八一頁。
- ⑯ 同 (2) 毎日 七八二七号 (二月三日)、全集 四八五頁。
- ⑰ 同 (3) 毎日 七八二八号 (二月四日)、全集 四八七頁。
- ⑱ 炉辺閑話 毎日 七八三六号 (二月二三日)。
- ⑲ 世人の注意を逸する社会の事実 国民の友 第三四〇号 (三月二〇日)。
- ⑳ 田舎の芝居 国民新聞 二一六〇号 (四月三日)。
- ㉑ 地方職人の現状 国民の友 第三四三号 (四月一〇日)、全集 五九七頁。
- ㉒ 北陸の慈善家 (1) 毎日 七九六三号 (六月二五日)、下層

社会第一編附記、全集 五八頁。

- ㉓ 同 (2) 毎日 七九六四号 (六月二六日)、下層社会第一編附記、全集 六一頁。

- ㉔ 加賀の工業 毎日 七九六七号 (六月三〇日)、全集 四八九頁。

- ㉕ 九谷焼 毎日 七九八七号 (七月三日)、全集 四九三頁。

- ㉖ 福井地方の機業 毎日 七九八八号 (七月四日)、下層社会第三編附記、全集 一二二 ~ 一二八頁 (とくに表記がない)。

- ㉗ 福井地方の工女 毎日 七九八九号 (七月二五日)、下層社会第三編附記、全集 一二二 ~ 一二八頁 (とくに表記がない)。

一八九六年九月から翌七月までの一〇ヶ月の北陸滞在期間に、横山は約四〇の記事を毎日新聞などに寄せている。そのうち、とくに北陸に関係する内容をもっているものは、以上の三十七とみてさしつかえない。このうち①、②、③、④、⑤、⑥の六論文を除いてすべてが、『横山源之助全集』第一巻に掲載されている。また目録中に記したが、⑩、⑪、⑫、⑬、⑭、⑮の各論文はほとんどその内容をかえずに『日本の下層社会』におさめられている(後述)。

さて、これらの論文はその内容からみて、(一)、北陸の地方下層社会について(④、⑤、⑥の各論文)、(二)、北陸の諸産業および労働事情について(②、③、④、⑤の各論文)、(三)、北陸の風俗、習慣、人物について(①、③、④、⑥、⑦、⑧、⑨の各論文)の三つに大別することができる。(一)、(二)については重要で

あるので、後にそれぞれ検討することにし、ここでは (三) について若干ふれておくことにしよう。

(三)の北陸の風俗、習慣、人物については、一〇の論文があるが、横山らしい観察力は④⑦の「田舎の正月」と⑧⑨の「北陸の慈善家」の二つに發揮されていると思われる。

「田舎の正月」は魚津周辺の農民、一般市民、職人、漁民のそれぞれの正月の過ごし方、行事などを記述している。その場合に、横山は単に各階層民の正月を紹介することのみを目的にしてはいない。とくに農民、市民(その例として官吏、学校教員をとりあげている)、職人の三者の正月を比較して、次の様に評価している点が興味深い。すなわち農民の正月は「笑う門には福来る、めでたしめでたし」とし、「自然にして楽しく、罪なき」ものとしている。この場合、ふだんの生活は年々窮するとしつつも、少くとも正月は、小作人も含めた農民全体をそのように評価している。次に市民の「正月は芽出たき事は半分もあらず、と余れには見ゆ」とのべている。その理由は東京のように芝居をみるわけでもなく、「花牌の流行、言落に絶する」ものがあり、「終局は必ず遊廓と繋がる」となげいている。さらに職人の場合はかつては正月十一日に「同業者集まり、交際を厚うするとともに同業者の規約を定め、賃金を定め」たりしていた。しかし、今では集まっても「乱酒するのみ」で、「『手商売』持たぬ者と軽んずる人力車夫の社会は、むしろ同業者の關係に於ては職人より多幸なり。あわれなる職人よ、今後益々競争激化するべき汝の前途を如何せんとする」とのべている。

横山は農民、市民、職人の三者の正月の生活を何気なく紹介し、

横山源之助と北陸地方

比較しながら、とくに職人、市民の正月の過ごし方に伝統的なもの(たとえば行事など)が失われていることを鋭く指摘している。その背後に資本主義的な生活感覚、生存競争といったものがあることを直接にはのべていないが、地方小都市附近にもその波が及んでいけることは行間にあふれている。職人に対して、前に引用したように「あわれなる職人よ……汝の前途を如何せん」とのべているその言葉には、深い同情がこめられているとみるべきであろう。

「北陸の慈善家」では、金沢において貧民、窮民の救済にあつてはいる慈善家の小野太三郎の活動をのべている。この論文は前にも少しふれたように、『日本の下層社会』の第一編、東京貧民の状態の部分に付記されている。ここでは貧民生活についてこまかく記したあと、金沢と大阪の慈善家を「今日日本の現状に於て、貧民問題の解釈者として」理解し、その紹介を載せているわけである。この論文において、横山は慈善家としての小野太三郎の活動に中心をおいてのべているが、同時に金沢市内の貧民の状態(出身地、仕事、日常生活ほど)及びその救済の実態なども記している。これは下層社会について各地の状況を観察してきた横山ならではの記録といえよう。『金沢市史』などにはこうした記録はうかがえない。史料的な意味も含めて、ぜひ再検討する必要がある。

(三)

北陸地方の下層社会について、横山は④から⑨まで、毎日新聞に一八回の連載記事を書いている。この一部は前述した様に『日本の

下層社会』の中にのせられているが、そのタイトルのわかるものだけを列記すると次の様なものである。都会の細民と地方の細民、火災と細民、土木工事と細民、一反歩の潤益、小作人の類別、旧幕時代の小作人、旧幕時代と今日、農家の内職、一ヶ年の所得、出稼、移住、下男、下女、親方と徒弟の以上である。このタイトルは、『日本の下層社会』に掲載されたものによったが、これから全体の内容は (1) 地方都市下層社会と細民、(2) 小作人の実態、(3) 地方の親方・徒弟の三つに大別することができる。

地方都市下層社会と細民については、まず地方(この場合富山県下)における細民、窮民、貧民の区別について簡単にふれたあと、「若し、人数の多を以て社会組織の一勢力となりせば、天下は或意味に於ては細民に由りて成れるものと謂うを得ん」としている。この場合、細民を統計的な意味から納税不能者および免税者にあてている。富山市の場合、一三、八九一戸のうち約七〇%、魚津市の場合、三、二一五戸のうち約六七%が細民であるとしている。以下地方の細民の生活実態について、たとえば居住場所、物価、仕事の内容(日傭人足、土木工事など)について観察したところを記述している。

この一連の論文の中で、もっとも重要な部分⑤の都会の細民と地方の細民の比較をしているところではないかと思う。横山は「地方は都会に比して、固より極窮の細民歟しと雖も、事情を酌んで渠等の實際を思えば、其の憐むべきは地方は都会に等しく、寧ろ或は勝るものあらん」とのべたあと、都会と地方の違いとして次の四点を具体的に指摘している。要約するとそれは以下の様になる。(1) 都

会の細民は妻帯者が少いが、地方の場合には大半が妻子をもち、近隣に親類をもっている、(2) 都会の細民同士の生活は日常社交、義理人情が少ないが、地方では人情味豊かである、(3) 都会の細民の妻の内職は自己のためであるが、地方の場合には家計補充のために内職をしている、(4) 都会の細民にとっては都会の生活の程度が高いため物品をもとめやすいが、地方では衣食住などの物品を得にくい。その他若干の指摘があるが、重要なものは以上とみてさしつかえない。

さて、こうした横山の指摘は何を物語っているであろうか。一つは、(1)、(2)でのべている点であるが、都会の細民は独身者が多いこととも関連して居住の地域社会からは独立していることの意味である。彼らはいわゆる都市の雑業をになう部分であるが、どうしてもその地域で生活しなければ生きていけないといういわば追いこまれた階層であったとはいいたい。その地域で生活できなければ、他へ移動する可能性をつねにもっていた部分といえよう。その意味では都会の細民は、都会という条件も含めてプロレタリア化する展望をもっていたわけである。一方、地方の細民はそれと対照的に特定の居住地域に家族もろとも根をおろし、そこで一定の生活のサイクルをもっていたとみてさしつかえない。したがって、居住地域での交際といったものにもある程度、関与することが、彼らの「生活の知恵」でもあった。しかし、地方の細民はそのままではプロレタリア化する展望はほとんどなかった。その地域社会になじんでいる限り、最低の生活はえたが、それ以上の希望は何等保障されていない。地域社会からいずれかの理由で排除された際には、彼らはおそらく都市の下層社会に出ざるをえなかったであろう。その際(4)で

のべられている様に、いきなり都市の下層社会にでても、何とかきりぎりの生活を守る一定の条件も又、あったわけである。

横山の指摘を以上のように考えてくると、我々は、横山がこの論文で都市と地方の細民の生活を単純に比較しているのではないことに気づく。その両者の相異をのべつつも、その両者の関係にもある程度関心をよせていたと考えることができる。簡単にいえば、地方の細民が都市にすることはあってもその逆はありえない、都市の細民のみにプロレタリアへの展望があったなどの点にそれがあらわれている。この点は、理論的な問題からいえば地方、農村の人口の都市への移動形態、農民の賃労働化するにあたってのコースの問題などのテーマと重なってくる。研究史の面からは、とくに原蓄期のプロレタリアの創出の過程として多くの見解があるが、いずれも確定的なものはない。横山の仕事の評価においても、地方の位置づけ、地方に関する論文については、やや脇におかれている感がある。たしかに、彼の多くの著作や論文の中で、都市に関するものが中心におかれているが、地方についての分析も、都市との関連性のもとで、前にみたように意図されていたことを認識する必要がある。ただこの論文が一連のものを含めて『日本の下層社会』に載せられていないのはなぜであろうか。この点ここでは『日本の下層社会』の内容を、その掲載論文からだけで評価してはならないこと、具体例として、一般的に指摘するだけにとどめたい。

次に富山県を中心とした小作人の実態を究明した一連の論文がある。これらは前述したように『日本の下層社会』の第五編小作人生活事情におさめられている。この点について西田論文では「富山県

横山源之助と北陸地方

は当時わが国有数の米産地であり、また大土地所有者の存したところ、従って、その小作人生活をとりあげたことは有益かつ至当であったが、それが一地方的であるということから『天地人』所載の『本邦現時の小作制度に就て』をこの篇の附録としたのである⁽¹³⁾とされている。これらの論文では、まず富山県下の小作人数、小作経営の収入、支出を具体的に例示し、「小作人ほど多大の忍苦を投じて得る所の報酬尠なく、其の生活の憫べきは世に多からざるべし」と結論づけている。さらに小作人の類別を耕地面積からおこない、旧幕時代の小作人との相異についてのべている。また、農家の副業を出稼ぎを含めて分析している。富山県の出稼ぎについては、一般的によく言われているように、飛騨地方の銅山、群馬信州への養蚕手伝いほか、北海道への漁夫などの例が紹介されている。これらの論文は全体としてやや迫力に欠け、内容も目新しいものではなく、また横山らしい独特なものが少ないように思われる。『日本の下層社会』の構成の面からみても、東京の貧民状態、職人社会、手工業、機械工場の実態といういわば都市の下層社会についてのべたあと最後の部分で、農民、小作人についてふれているわけである。農民、小作人に関する分析がややつけ足された様な唐突な感じを与えている。横山自身の経歴をみた際にあきらかにしたように、横山は町の職人社会で青年時代をすごしており、農民として育った長塚節の『土』でみせている農民の観察力、描写力にはおよばないのはやむをえない。また、内容からみても、掲載されなかった地方の下層社会の分析の方が数段まさっている。

最後に地方の親方、徒弟制について簡単にふれておこう。この論

文では東京において、まだふるい親方、徒弟制度が多くのことについて、地方ではそれがくずれはじめていることに注目している。例えば年期については、一〇年前は五〜八年であったのが、二、三年に短くなっている。また、その間親方の家に住込んでいたのが通いとなつていし、そのため親方と徒弟の間の関係（情愛）がうすれている。さらに、年期後のお礼働きもすくなくなり、師弟間の衝突もおこるといった具合である。横山はこうした傾向が地方の各種の職人の中にあつてゐることを指摘しているが、その理由、背景についてはここではまづたくふれずに終つてゐる。この論文が、一連の地方の下層社会に関する仕事の最後の部分をなしており、一応その結論めいたものを意図してゐると想像される。普通、職人社会の親方・徒弟制度の崩壊は、工場における機械化の進展にともなつて、工場内部の（手工的）職人の親方、徒弟制度の崩壊に次いであらわれる現象と考えられてゐる。この点は後に横山自身が「東京の工場地及工場生活のパノラマ」⁽¹⁶⁾などでのべている点でもある。もちろんこの場合東京などの大都市の機械制工場などを念頭においてゐるわけであるが、地方においてはそうした関係では説明のつかない現象が、一〇年も前から進行してゐたわけである。

この論文を補足するものとして、④の地方の職人の親方、徒弟制度が急速にくずれつつあることを指摘しているが、その理由として次の二点をあげてゐることに注目したい。そのひとつは、かつては職人間に同業組合的な太子講があり、賃金、弟子入りの年限、縄張りなどを厳しくとり決めていたが、年々職人の生活が苦しくなるにしたがつて職人間の競争が激しくなつた。そのため同業組合の約束

が守られなくなつたことを理由としてゐる。さらに、そうしたなかで、各職人には特定の得意先が次第になくなり、請負い仕事が多くなつた。したがつて得意先に特別な技術をふるうことが不必要になつた。特殊な技術を親方から徒弟へ伝達することがあまり重視されなくなつたことをあげてゐる。大都市の前にみた状況とはことなつて、地方では職人間の競争が、大都市とは別に、それより早い時期に親方・徒弟制度の崩壊をうながしたと横山はのべているとみてさしつかえない。こうした横山の地方の職人制度の変化についての分析は従来あまり注意されていない点なので、ここでとりあげて評価したわけである。

(四)

北陸の産業については石川・福井の絹織物、九谷焼などに関する論文がある。横山は一八九六（明治二九）年八月に魚津にいたるまでの間同年の三月〜七月に桐生・足利地方の絹織物工場などの視察をおこなつてゐる。その間、約三〇近くの論文を書いている。横山は桐生・足利において、これだけの意欲で機業界の報告を送つてゐるが、北陸の機業界では横山の視察欲をおこさせる材料が少なかったのであろうか。故郷での療養の後であり、また大阪での仕事の途中ということもあり、石川・福井に長期間滞在し、視察する余裕がなかつたのであろう。

まず④の加賀の工業では石川県の絹織物などの工業についてその概略についてのべてゐるが、次のような興味ある意見を紹介してお

こう。

「加賀の物産として挙ぐべきは輸出羽二重あり、ハンカチーフあり金銀箔あり、是は金沢の物産なり。地方大都会として是等の物産を有す、別に称するに足らずと雖も、近来切りに百万石風を脱して事業に意を注ぐに至れるは喜ぶべし」⁽¹⁶⁾。何か現在にも通ずるような指摘とでもいふべきであろうか。

また、羽二重の生産については全国的にみても福井・石川が大半をしめているが、「福井地方が景氣のよき時は、石川地方景氣悪しく、石川地方の良き時は福井地方悪ししと。何に依りて然るや明瞭に谷弁を得ざりしと雖も、福井と石川とは其の製出品自から異なり居り」⁽¹⁷⁾としている。そのちがいは福井産にくらべて石川産は軽いとにあるとし、「総じて福井に比して金沢地方の工女の性質が緻密なるに申るものならん歟」⁽¹⁸⁾とのべている。金沢は「百万石を脱して……喜ぶべし」といふ、その「工女の性質が緻密なる」という横山の表現は興味深いものがある。

福井県の絹織物業については、『日本の下層社会』の第三編、手工業の現状、第一章桐生・足利地方の織物工場の最後の部分に附記されている。第一章は、一八九六年の当地視察報告をもとにして構成されているが、その附録の体裁で、福井の実情が載せられているわけである。桐生・足利と比較するには、福井についての記事はあまりにとほしい。それより、その冒頭の部分で「越中を過ぎ加賀を過ぎて福井に來れば初めて工業地に入るの心地す」⁽¹⁹⁾とのべ、福井を北陸唯一の工業都市にみている点に注目したい。続いて「裏町に入れば機具を繰るの響音彼方此方に聞こえ、表通にては『羽二重買

込所』の看板張れる商店屈指に暇あらず。加えるに汽車の往来、汽笛の声を市中に送りにて、腕車の往復激しく、之を富山金沢の如き路上に立ちて、往来の人力車を備い得る寂寞たるものに比せば、草深かき片田舎より、俄かに都会に出でし心地せらるるなり」⁽²⁰⁾としている。富山金沢を片田舎とし、一方福井を都会としているわけであるが、その理由としてひとつは工業の実情もあるが、北陸線の影響もあるように思われる。北陸線の開通は他の資料によると敦賀までが一八九六（明治二九）年七月一日、福井までが翌九七年九月二〇日、金沢までが翌々九八年一月一日となつてゐる。横山が福井をおとづれたのは一八九七（明治三〇）年七月であるから、厳密には、北陸線の開通直前だったと思われるが、もうその準備がほとんど出来あがつていた時期である。したがって、鉄道の面から、福井と金沢・富山の景観に大きな違いがあったと想像されるわけである。

北陸の諸産業、労働事情に関する論文のうち、もっとも傾聴すべき意見は、㊸の地方の下女私底であろう。その大略は次のようなものである。

近年都市・地方においてもっとも給金がよいといわれていた宿屋の下女をはじめ各下女が不足をきたしている。その理由は、各地の紡績所、製糸所、織物工場などの工女に、年頃の少女がやとわれることにあるようである。工女と下女の収入をくらべると、下女は六ヶ月に二〜三円であるのに対して、工女の収入は月に三円をこえる。こうした事情から下女の不足がおこっていると「下女私底、余は或意味に於て工業の進歩を意味せるものとして、下女の位置を

高むるものとして深く之を喜ぶ。雖然、工業の発達と共に年に農業労働者の減少し行くは、国家前途の爲めに寡に憂慮なき能わず」と結論づけている。横山は地方における女子労働力が都市の纖維産業に吸収されている点を着実に見抜いているといつてよい。さらに、そのことをつうじて、工業と農業のアンバランスが生まれることも予想しているわけで、こうした点が横山の觀察力の鋭さをうかがわせるものといえる。

北陸の諸産業などについての横山の叙述は、その数が少ないこともあるが、彼本来のものが乏しい。とくに、石川・福井を中心とした織物業について、何となくものたりなさを感じる。富山の種々の事情については、彼が比較的長く滞在したこと、前記のべた様に多くの資料・評価をわれわれに残してくれた。石川・福井については、交通事情が悪い時期に、しかも通りがかりに視察した感じが強い。

(五)

前章までにおいて、毎日新聞時代の横山の北陸地方に関する論文をとりあげ、その評価をおこなってきた。とくに(三)では、『日本の下層社会』との関連についても、若干ではあるが論及してきた。ここでもふれた点であるが、この時期の北陸に関する論文でもっともすぐれたものは、一八篇からなる「地方の下層社会」であろう。われわれは、この一連の論文の中で都市と地方の下層社会を比較し、部分的には都市・地方の相互連関性についてふれていることにその特色を認めた。しかし(二)、(四)でふれたように、他の論文の中にはこ

うした「地方の下層社会」にみられた視点を見いだしにくい。このことは、やはり厳密にうけとめておく必要がある。横山の仕事の多くは小田切秀雄もいうように、都市の下層社会、下積みの労働者に焦点があつたといえよう。これは全体の仕事をひとつひとつみるまでもないことである。横山の代表作の『日本の下層社会』の目次をみるだけでも事がたりる。すくなくとも横山の活動の前半をなす毎日新聞時代と限定してもよい。

このようにみるならば、この毎日新聞時代の北陸地方に関する仕事は、いわば横山にとっては本来の目的・関心から少しはずれたものであつた。病氣によって、療養のために故郷に滞在したといったアクシデントがもたらした仕事といつてもいいすぎではない。

横山には都市のイメージはかなりはっきりとしたものとしてあつたと思われる。それは彼にとつて工場であり、労働者であり、資本主義社会そのものであつた。しかしそれはことなつて、明確な地方についてのイメージはなかつたのではなからうか。彼にとつて地方は農村であり田舎であつた。また農民であり、地方職人である場合もあつた。したがつて地方を圧倒する都市、農村をほろぼしていく工場生産といった、はっきりとしたかたちで都市と地方との関連をとらえきつていなかつたといえよう。(三)での横山の視点は、彼が無意識のうちにとらえたものであつたと考える方が正確であろう。しかし現在からみれば、それが無意識な觀察・評価であつたが故に貴重でもあるといえる。

北陸地方において都市と地方との関係をもつと適確に考えるには、横山が訪れた時期が少し早すぎたようである。この一八九六、

七年の時期は、まだ北陸に資本主義の波が押しよせてはいなかった。正確には波がきつつかつたが、それほど大きな影響を与えるまではいたっていない。北陸地方が資本主義の波にさらされ、都市との問題を考えざるをえなくなった時期はおそらく日露戦後のことであろう。この点について、筆者は石川県(23)の論文の中で部分的にはあるがふれておいた。北陸地方にとって大きな変化の画期は日露戦後とみてまちがいないが、それ以前においてもたとえ北陸線が開通し、大阪との直接の関係ができた以後は、その変化が徐々にあらわれたとみてさしつかえない(前述したように北陸線が北陸三県をとって富山まで開通したのは一九〇〇年のことである)。その意味では横山の北陸滞在は、その変化の直前の時期であったわけである。

その後、横山は毎日新聞を退社してから、一時期北陸にもどっている。そして彼は北陸についていくつかの論文を書いている。一九〇三(明治三六)〜七年にかけて一〇数篇の論文がある。それらの内容を続いてもう少し検討する中で、横山の地方観について評価しなおす必要がある。ただ残念なことには、地方、すくなくとも北陸地方が大きな変化に直面したであろう日露戦後の時期に、横山の関心は移民問題に向いてしまっている。一九〇六(明治三九)年頃より移民会社、南米での日本人の活動についての論文が多くなり、一九一二(明治四五)年三月にはブラジル移民を輸送する船に乗ることとなった。なぜ彼の目が移民にむいたのか、彼のそれまでの活動とどの様な関連があるのか。こうした点をも含めて、別に検討する

横山源之助と北陸地方

機会をもってみたいと思う。
註

- (1) 『横山源之助全集』第一卷(明治文献、一九七二年二月)六五五〜六五六頁。
- (2) 同右 四八四〜四八五頁。
- (3) 同右 四八五頁。
- (4) 同右 四八六頁。
- (5) 同右 四八八頁。
- (6) 同右 四八八頁。
- (7) 同右 四八八頁。
- (8) 同右 五八頁。
- (9) 同右 四六五頁。
- (10) 同右 四六七頁。
- (11) 例えは『日本資本主義と労働問題』隅谷三喜男・小林謙一・兵藤剣著(一九六六年東大出版会)『明治前期の労働問題』明治史料研究連絡会編(一九六〇年お茶の水書房)など。
- (12) 西田長寿「横山源之助著『日本之下層社会』の成立」『歴史学研究』一六一号(一九五三年)所収、三八頁。
- (13) 『横山源之助全集』第一卷 二五四頁。
- (14) 『新公論』第二五年第九号所収(一九一〇年)。
- (15) 『横山源之助全集』第一卷 四九〇頁。
- (16) 同右 四九一頁。
- (17) 同右 一二三頁。
- (18) 同右 一二三頁。
- (19) 同右 一二三〜一二三頁。
- (20) 同右 二八〇〜二八一頁。
- (21) 『北陸線の記録』金沢鉄道管理局編(一九五二年)一四頁。なお『石川県史』現代篇(2)では「工事は順調に進み二十九年(明治一引用者注) 福井、……三十二年四月には金沢に達し」(四三三頁)とある。この説をとれば北陸線は開通していたことになる。
- (22) 『金沢大学法文学部論集』経済学科篇19。また別稿「日露戦争期における地方の動向(前掲20所収予定)」の中でも具体的に分析を試みているので参照していただきたい。

(金沢大学講師)